

b ニュージーランド Lytton高校オンライン交流

週3回（火曜日（2コマ）・水曜日）

生徒人数：国際生徒：13人 リットン生徒：約8 計：21人



今年、私たちは2024年5月から10月まで、ニュージーランドのリットン・ハイスクールとオンライン交流を19回実施した。この拡張された交流の目標は、異なる国の同学年の生徒たちと学んだ英語を使う機会を提供することだった。これは、留学を希望する生徒たちのために設計された「海外進学」クラスに所属するEAP（English for Academic Purposes）の生徒たちを対象として、毎週火曜日・水曜日（3コマ）に実施した。これにより、生徒たちは実際の状況で会話を始め、質問をする主導権を取る機会を得ることができ、卒業後に大学で留学する予定の生徒たちにとって有益だった。

交流の準備のために、私とリットン・ハイスクールの担当教師で、4月末から交流の進行方法、内容、話すべきトピックについて話し合い、最後に課題を通して3グループに分けて、国際高等学校の紹介動画を作った。最初のセメスターでは自由な交流があると生徒たちにとって有益であると考え、これにより生徒たちは留学時と同じような自然な会話の機会を得ることができた。また、リットンの生徒たちが日本語を学んでいるため、国際の生徒から役立つフレーズを教えた。

2024年5月から10月初旬まで、毎週火曜日（1限目と2限目に90分）と水曜日（2限に45分）の交流を行い、長い時間をかけて自然な会話ができた。交流はクラス全体で行われた。参加しながらメモを書いて交流が終わってすぐノートに振り返ることを書いた。振り返りノートのおかげで生徒達はどんどん出来たところと出来てないところがはっきり分かり、英語力が伸びが実感できた。

今年の交流からは、クラス内だけでなく、クラスの外でも関係を築くことができた。クラス全体で一緒に海外旅行するのは難しいが、異なる国でコミュニケーションする経験を教室にもたらすことができた。新しい国の方と交流して話が止まったり緊張感が出たりしたが、生徒たちはComfort Zoneの外の人々と話すことに対してより快適に感じるようになった。

c ドイツの高校

ドイツのCJD Königswinter: 対面の交流

日時 令和6年3月30日 (土)

参加人数 相手校：7人 当校8人 (1・2・3年生)

交流内容

- ① 令和5年ビデオ交流の後、個人でオンライン交流を続ける
- ② 1月~2月 奈良公園の案内する計画
- ③ 3月30日(土) 奈良まちで会って、奈良公園へ散歩 (CJD・奈良国際高校)

奈良公園でのドイツの CJD Königswinter・国際高校の対面交流



総括 両校の生徒はお互いの語学力に刺激を受け、本校の生徒は奈良の世界遺産を外国人に案内することに誇りを感じていた。特に2年生にとっては、ドイツ語のスキルを地元で「ツアーガイド」として実際に使うチャンスだった。

改善点 ドイツと日本の学校スケジュールの違いにより、日本ツアーは3月末と4月初旬にしか予定できなかった。日本では年度始めの忙しい時期だったため、今回も学校訪問ができなかった。

ドイツのKTS Köln/CJD Königswinter/Gymnasium Rodenkirchen: ビデオ交流

日時 令和6年9月~令和7年2月

参加人数 相手校：26人 当校14人 (2・3年ドイツ語選択者)

交流内容

- ① 9月 ドイツからの動画を視聴(1・2・3年生)
「自己紹介、UEFA欧州選手権、ドイツに電車に乗ること、ドイツにスーパーで買い物すること、ケルンの名所」
- ② 10月 グループで両言語の動画作成 (2・3年生)
「自己紹介、名前の漢字、趣味、部活動、学校生活、ドイツのカフェの遠足、日本の新札」
- ③ 12月 生徒のメッセージカード・動画とお土産をドイツに送付
- ④ 2月 ドイツの生徒から感想やコメントの伝達

KTS Köln/CJD Königswinter/Gymnasium Rodenkirchen作成動画 (9月)



国際高校から送った感想とお土産 (11月)



国際高校作成動画 (12月)



ドイツから寄せられた感想とお土産 (2月)



ドイツのKTS Köln: オンライン交流

日時 令和6年11月5日(火) 20時00分～21時00分

参加人数 相手校：8人 当校11人(2年生8人、3年生3人)

交流内容

- ①あいさつ (3年生の3人の代表)
- ②学校紹介 国際高校 (日本語)
- ③学校紹介 KTS Köln (ドイツ語)
- ④ブレイクアウト・ルームへ

- 「両言語での自己紹介」
- 「ドイツ語、日本語（と英語）のフリーチャット」
- 「ソーシャルメディア情報の交換（希望者のみ）」
- ⑤集合写真
- ⑥最後のあいさつ

感想　ドイツのパートナー校の友人とオンラインや直接会うのは2回目、3回目という生徒もいて、コミュニケーションを続けることに興奮していた。また、ビデオでしか見たことのない生徒と初めて会う生徒もいた。オンライン交流終了後、振り返り、次回はさらに円滑なコミュニケーションをとるための計画を立てた。2年生と3年生にとっては、学んだ言語を披露する良い機会であると同時に、テクノロジーを通じて国際的な友情を築く良いチャンスとなった。

改善点　ドイツ側が直前で欠場したため、グループ構成が少しアンバランスになった。とても静かなグループもあれば、とてもエネルギッシュでよくしゃべるグループもあった。グループでのコミュニケーションや社交的なスキルの向上に努め、リーダーやタイムキーパーなど、グループの役割分担を決めることで、生徒たちがより心構えができるようにしたい。

d メキシコ学院・ひまわり日本語学校交流

今年度は6月24日～28日の5日間、日本メキシコ学院の生徒7名を対面交流という形で本校で受け入れをした。メキシコ人生徒は本校生徒の家庭にホームステイをしながら、学校生活を体験、交流を楽しんだ。この日は世界の言語の授業がある日であったため、1年生～3年生の各スペイン語の授業に入り、交流を楽しんだ。

メキシコ学院の生徒は、ホスト受け入れ生徒と同じクラスに所属し、一緒に授業を受けた。日本語での授業はハードルの高いものとなったが、ホスト生徒やクラスメートのサポートを受けながら楽しく授業を受けた。

水曜日と金曜日は世界の言語の授業があるため、1年生から3年生のスペイン語の授業でそれぞれ交流を行った。1年生は、スペイン語を学び始めて数週間しか経っていなかったため、簡単な自己紹介や本校生徒が事前に用意したスペイン語圏の国々に関するプレゼンテーションを日本語で行った。2年生の授業では、日本の文化やアニメに関するクイズを全体で行った後、グループに分かれて日本で人気のある「なんじゃもんじゃ」ゲームをして楽しんだ。本校生徒のスペイン語力は基礎的に留まっているが、身振り手振りや相手に思いを伝えようとする態度がコミュニケーションをとる上で大事であることを実感した。3年生の授業では、メキシコの民謡曲「シエリト リンド」を生徒の演奏と歌で歓迎し、その後はサイコロトークやペン習字体験と一緒に取り組んだ。また、メキシコ学院の生徒がメキシコの文化（食事や音楽、スポーツ、言語など）についてひとりひとりが5分程度のプレゼンテーションを日本語や英語で行った。

昨年度は1日のみの体験入学という形であったが、今年度は5日間のホームステイも含めての交流となった。それでも短い期間の交流ではあったが、直接会って交流、対話することにより、オンラインでは味わうことのできない心の通じ合った交流ができたように思う。また、ホームステイを通じてメキシコ人生徒だけでなく、本校の受け入れ生徒にとっても異文化交流の貴重な機会となった。交流の時の両校の生徒の生き生きとした姿、うまく言葉を話せなくても相手に伝えようとする気持ちが直に通じ合い、真の国際交流、異文化理解を進めることができた。

今年度、2年生スペイン語選択者（39名）はメキシコ合衆国の中部グアナフアト州にある、ひまわり日本語学校と11月と2月（予定）にオンライン交流を行った。第1回目となる11月の交流では、ひまわり日本語学校の学生が主導となって、日本語とスペイン語を交えて自己紹介や両国の文化をテーマにした絵しりとりなどをして交流を楽しんだ。また、好きな食材を紹介し合って、オンライン上でオリジナルのタコスを作るという取り組みを行った。両校の参加人数もちょうどよい数になり、1グループ4人程度でブレイクアウトセッションを利用し、少人数で深い交流を行うことができた。スペイン語ネイティブとの初めての交流ということもあり、事前指導ではメキシコ特有のスペイン語などを紹介し、交流当日に積極的に使うように促した。



e 台湾 国立嘉義高級中学校

日時：2024年6月5日 15:20 午後(日本時間)

参加人数：相手校31人、本校37人（2年生27人、3年生10人）

<https://m.youtube.com/watch?v=nCym6FBMg-A>

交流内容：

- 1) 接続+グループ分け (10 分)
- 2) 代表者による挨拶(5分)
- 3) 嘉義高校Kahoot! 台湾常識+面白い中国語クイズ大会(15 分)
- 4) 奈良国際クイズ大会(15 分)
- 5) グループ交流時間
- 6) 撮影+交流会の終わりの挨拶 (5 分)

感想と改善点：初めてクイズ形式で交流したが、とても楽しく交流が出来て良かった。初めて一年生の教室を使ったが、放課後の集会と片付けに時間がかかったので、出来るだけプレゼンルームなどを使用した方がスムーズだと思った。

まだ、生徒たちは幾つかの教室に分かれており、一部の生徒は名前とグループを変更していなかったため、最初のZoomのグループ分けに非常に多くの時間がかかった。次回は事前に教室に到着し、名前とグループの変更を確認したい。



日時：2024年11月27日 15:20~16:20 午後(日本時間)

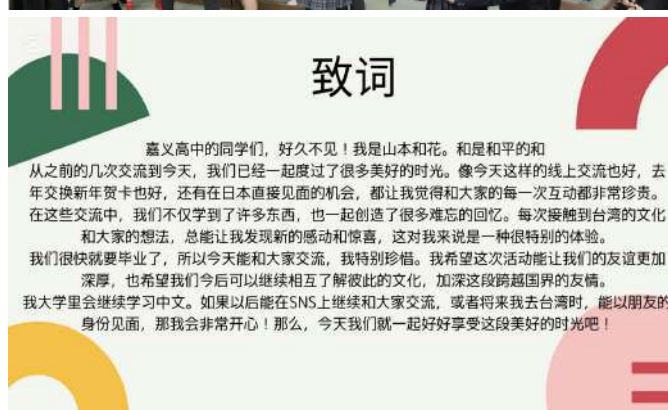
参加人数：相手校37人、本校15人（3年生9人、2年生6人）

場所：

交流内容：

- 1) 接続+グループ分け (10 分)
- 2) 代表者による挨拶(5分)
- 3) 嘉義高校Kahoot! 台湾常識+面白い中国語クイズ大会(10分)
- 4) グループ交流時間 (35分)
- 5) 撮影+交流会の終わりの挨拶(5 分)

感想と改善点：3年生の最後の交流会で、皆が十分な準備をしていたため交流は順調に進んだ。そして、3年生の学生たちも自分の中国語の成長を感じながら感想を書いた。



f サン・テレーズ高校

フランス西部・カンペール（Quimper）に位置するサン・テレーズ高校（Lycée Sainte-Thérèse）とオンライン交流を続けている。令和6年度はサン・テレーズ高校の訪日団が来校し、対面での交流も実現した。

1 オンライン交流

● 1回目

日時：2024年6月5日（水）（日本）15:00～16:00（フランス）8:00～9:00

場所：本校つながるーむ

テーマ：自己紹介、好きな食べ物、教科、漫画(アニメ)、場所、スポーツ、音楽

参加者数：（本校3年フランス語選択者は全員参加、2年生は希望者のみ参加）

	3年	2年	1年	合計
国際高校	8	10	0	18
サン・テレーズ高校	0	7	10	17

【概要】

これまでと同様、開会行事等は行わず、Zoomに接続してすぐ交流に移った。ブレイクアウトルームを作成し、生徒を3つのグループにわけて交流した。60分の時間のうち、20分をフランス語で話す時間、20分を日本語で話す時間、20分をどの言語で話してもよい時間と設定したが、実際はどの時間にどの言語を用いてもよいこととした。また、会話の内容もテーマにとらわれず、自由にしてもよいと伝えた。

最初の方は、緊張もあってなかなか会話が續かない様子であったが、時間が経つにつれ活発な意見交換ができるようになった。

● 2回目

日時：2024年12月5日（木）（日本）16:00～17:00（フランス）8:00～9:00

場所：本校つながるーむ

テーマ：クリスマスやお正月などのイベントについて

参加者数：（本校3年フランス語選択者は全員参加、2年生は希望者のみ参加）

	3年	2年	1年	合計
国際高校	9	5	0	14
サン・テレーズ高校	8	13	0	21

【概要】

サン・テレーズ高校は10月に来日した生徒が参加した。画面越しではあるが、久々の再会を喜んでいる様子が見られた。

交流の流れはこれまでと同様の形で行った。テーマはクリスマスやお正月の過ごし方についてであった。どのように過ごすか、誰と過ごすか、何を食べるのかなどについてお互いの生活を紹介しあった。

2 対面での交流（2024年10月16日～18日）

サン・テレーズ高校の日本語選択者対象の日本研修旅行が行われ、10月16日から18日の3日間、本校で授業を体験した。サン・テレーズ高校の生徒は全員本校生徒宅にホームステイをし、日本の家庭での生活を体験することができた。

来日前にお互いに自己紹介のビデオを撮影し、Padletで共有した。サン・テレーズ高校は日本研修旅行に参加する生徒が、本校は2年・3年のフランス語選択者がビデオを撮影した。

10月16日の朝、全校生徒を集めて歓迎式典を行った。その後、オリエンテーションの後各クラスに入った。この3日間、生徒はホストスチューデントとともに登校し、授業を受け、昼食をともにし、放課後の部活動にも参加するなど、密度の濃い時間を過ごした。10月16日（水）、18日（金）は世界の言語の授業があったため、サン・テレーズ高校の生徒全員にフランス語の授業に入ってもらった。お互いの言語がまだ十分に話せる状態ではなかったが、生徒同士様々な方法を使って楽しく交流していたのが印象的であった。



本校2年生・3年生のフランス語選択者との集合写真

3 その他

昨年度同様、クリスマスカードの交換を行った。本校生徒はロイロノートで作成し、それをまとめたPDFファイルを担当教員がメールで送信した。

g 世宗国際高校

1 学期は7/16にリモートで2、3年生ともに約50分ずつ交流した。2年生は自己紹介と予め質問を交換し、それぞれの言語で答えを準備し交流をして、3年生は終始フリートークで交流した。

2 学期は、10/29~11/1までのスタディーツアーで2年生が韓国を訪れ、10/30に世宗国際高等学校へ行き、対面での交流をした。3年生のみ、12/19にリモートで約50分フリートークで交流をした。

h 奈良韓国教育院 韓国文化体験

—古代日韓交流の遺跡地を巡る旅（奈良）— 「飛鳥の風、'ナラ'を創る」

- 1 主催：駐大阪大韓民国総領事館 主管：奈良韓国教育院
- 2 目的：奈良地域の日韓古代交流遺跡探訪を通じて日韓親善交の歴史を理解する。未来志向的な日韓関係改善の必要性和重要性を認識してその主役として成長する。
- 3 日時： 7月11日（木）8：50～16：50
- 4 参加者： 生徒23名 引率教員3名 大韓民国領事館、奈良韓国教育院関係者4名 留学生グループリーダー（大学生）3名
- 5 日程： 開会式後、バスにて法隆寺見学、夢市茶屋にて昼食、石舞台あすか風舞台で韓国伝統遊び体験（トゥホ、ボナ回し）、飛鳥寺見学、キトラ古墳見学
- 6 写真



法隆寺



法隆寺境内



夢市茶屋



あすか風舞台



飛鳥寺



キトラ古墳

7 感想

◎「今回学んだこと」

- ・奈良にある歴史的な遺産の背景は今まであまりしらなかったが、今回、日本と韓国は昔から深い関わりがあったことを学んだ。
- ・留学生から韓国の流行の言葉を教えてもらうことができた。
- ・韓国の昔遊びを知ることができた。

◎「今回学んだことを活かして、これから、どのようなことをしていきたいですか。」

- ・互いの文化を学ぶことでお互いに認め合えるような関係を築いていきたい。
- ・韓国語を話すときに間違いを恐れずに積極的に話していきたい。

- ・ 韓国のことについてもっと知りたいと思った。
 - ・ もっと多くの人に、韓国と飛鳥の歴史について知ってもらえるようになったらいいなと思った。
- ◎「主催者やガイドさん、グループリーダーの大学生へのお礼の言葉」
- ・ 次にお会いしたときに、韓国語でお話ができるようにしっかり勉強します。
 - ・ グループリーダーが日本語で韓国のことをたくさん教えてくださいました。
 - ・ 皆さんのおかげで、もっと韓国の文化や歴史、韓国語をより詳しく勉強したいと思うようになりました。
 - ・ 来年もあれば是非参加させていただきたいです。
 - ・ 韓国からの留学生の大学生と交流できてよかったです。

ー韓国の海苔巻き「キンパッ」を作ってみようー

- 1 主催：奈良韓国教育院
- 2 目的：キンパッ作りを通して韓国の食文化・歴史を理解する。
- 3 日時：10月22日（火）13：00～15：00
- 4 参加者：生徒15名 監督教員2名 奈良韓国教育院関係者3名
- 5 日程：放課後、校内調理室にて実施
- 6 写真



i 中学生の国際交流

1. 中学2年生「ウズベキスタン第8中学との交流」

2025年の大阪万博に向けて、奈良県との姉妹都市提携を結ぶウズベキスタンサマルカンド市、サマルカンド第8中学とのオンライン交流を実施した。事前学習として昨年度、ウズベキスタン大使館より講師を招き、ウズベキスタンについて学習会を実施し、その後、サマルカンド第8中学の友だちに中学2年生全員が手紙を書いた。ウズベキスタン大使館より現地に送っていただいた。

今年度はいよいよサマルカンドとオンラインでつながり、交流を行った。ボランティア生徒を募り、生徒たちがオンラインの司会を担い、英語で学校紹介を行った。サマルカンド第8中学は日本語で学校紹介をしてくれた。その後、両学校の生徒がそれぞれの学校や国についてのクイズを出し合うなど、約1時間の交流をすることができた。

10月22日(火) 中学2年生 サマルカンド第8学校 オンライン交流会						ESD部
オンライン交流会	start	finish	min			備考
	12:50	13:00	10		接続確認	zoom open 国際中
	13:00	13:05	2	全体	あいさつ	各学校代表教員 国際中(中尾校長) サマルカンド第8中 ()
	13:05	13:08	3	準備時間(調整時間含む)	発表準備	
	13:08	13:18	10	全体	学校紹介(国際中学校)	ボランティア生徒
	13:18	13:21	3	準備時間(調整時間含む)	発表準備	
	13:21	13:31	10	全体	学校紹介(サマルカンド第8学校)	ボランティア生徒
	13:31	13:33	2	準備時間	準備	
	13:33	13:43	10	国際中学校 グループ①～⑥?	日本にまつわるクイズ	各クラスから3チームが出題
	13:43	13:45	2	準備時間		
	13:45	13:55	10	サマルカンド第8中学校 グループ①～?	ウズベキスタンにまつわるクイズ	
	13:55	14:00	5	全体	あいさつ	各学校生徒代表 国際中() () サマルカンド第8中 () ()

* 準備時間が必要でない場合は、予定時間より早くても進めていく

教員打ち合わせ: 9月19日



(奈良県立国際中学校(左)とサマルカンド第8中学(右)のオンライン交流のスクリーンショット)

2. 中学1年生「北京101中学との交流」

奈良県観光課より依頼があり、北京より31名の中学生の訪問を受け入れた。中学1年生との交流会を企画した。中学1年生にとっては初めての海外からの訪問団の受け入れと交流で、生徒はとても楽しみにして準備にも力が入った。日本語ができない中学生とのことであった。まずは事前準備において、生徒に「おもてなし」につい

て考えてもらった。どうすれば「日本に来てよかった」と思えるか、「日本が好き」と思ってもらえるか、などを話し合い、共有した。

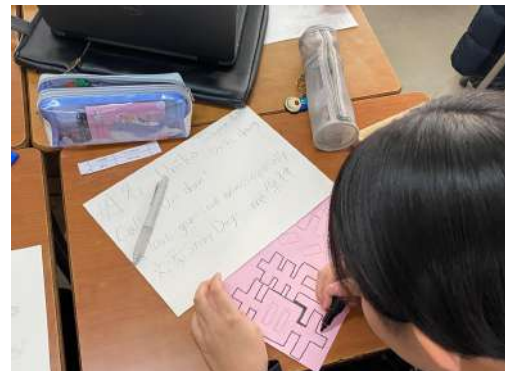
- ・中国語であいさつをする
- ・中国のことを勉強する
- ・日本のことを知ってもらう
- ・折り紙を一緒にする
- ・日本語で話さない（自分たちだけで）
- ・笑顔

などの意見が出た。

自己紹介をするために、画用紙に伝えたいことを書いて表現したが、中国語で書きたい生徒も多く、急遽中国語基礎講座を開講することにした。簡単なあいさつや使えるフレーズなどをみんなで練習し、日本語と中国語の漢字の違いなども学んだ。来校する中国中学生全員のウェルカムボードも作成した。



（中国語基礎講座）



（ウェルカムボード作成）

交流の際にはグループで名前の読み方を教えあったり、それぞれの言葉で数字を教えあったり、それぞれの言語で自分の誕生日を伝え、全員でバースデーラインのゲームをしたりして楽しんだ。お互いの言葉はわからなくても、つたない英語も使いながらなんとか伝えようとする意欲的な姿勢がさまざまな場面で見られた。

生徒の感想からは「とても楽しかった、あっという間で時間が足りなかった」「もっといろいろ話ができるようになりたいと思った」「中国語を勉強して話せるようになりたいと思った」などがあがった。



日程:

10:15 (予定) ~	Welcome Ceremony (大会議室) 校長あいさつ、記念品交換 等	
10:40-11:25 10:40-11:00 10:45- 11:00-11:15 11:15-11:25 11:25-11:40 11:40-11:50	中学1年生(73名)、中国中学生(32名)は体育館へ 国際生は前をあげて(マイクの位置を確認、マイクより後ろに座る)、A組B組で6列で座る 中国生徒入場、 対面式のイメージで向かい合って2列に並ぶ 学校長あいさつ、北京101教員あいさつ 記念品交換 中国生徒は舞台に向かって座る あいさつ(生徒代表) 学校紹介(国際中学校) 学校紹介(中国訪問団) A組2名・B組2名・中国中学生2名のグループをつくる (プラス1人、7人グループが主 15ファミリー) 名前を漢字・ひらがな・ローマ字等で書いたものを用いて自己紹介 自己紹介が終わったら全員その場に立つ 7人全員がそれぞれの名前を覚える 全員の名前が言えるようになったらその場に着席 ファミリーで中国語の数字の読み方と、日本語の数字の読み方を教え合う(1から31まで) 自分の誕生日を、お互いの言語で言えるようになる 国際生は中国語、中国生徒は日本語のみOK、バースデーライン 答え合わせ	中国生徒は本日必要な荷物を全て持って移動(大きな荷物等は会議室に置いておく) 教え合う
11:50-12:00 12:00-12:15 12:15-12:20 12:20-12:50 12:50	中国でのじゃんけんと日本のじゃんけんをファミリーで教え合う、何回かやってみる ふつうのじゃんけん 順番に並ぶ あいこじゃんけん 何人かに感想を聞く 協力は強力!(勝負するのではなく、協力することが大切!) A組:ファミリー1~5 B組:ファミリー6~10 あつまるーむ:ファミリー11~15 12:50におわかれ、大会議室に送っていく 12:55には中国中学生は大会議室に集合する 国際中学生は5時間目の授業へ移動	中国生徒は教室で弁当を受け取る ファミリーごとに昼食 あつまるーむの生徒はゴミ箱に食べ物ゴミを捨てない
13:15 予定	奈良公園へ出発(大型バス)	

j 今後の計画

- ・ EAP II クラス、各言語クラス共に現在の交流校と継続して2025年度も交流を行う予定。
昨年と同様、日本メキシコ学院とサンテレーズ高校から体験入学希望があり、4月以降に具体的に内容を検討していく。

スタディーツアーで2025年度も韓国・世宗国際高校に11月19日に訪問し、共同学習をすることが決定。

また、姉妹校であるサンテレーズ高校から、フランス・キャンペール州から予算がおり本校引率教員の渡航費用等を援助できるので、体験入学とホームスティのご招待を頂いており、実施可否も含め今後検討予定。

その他にも来校の招待を頂いている交流校があるので、インバウンドだけでなく本校生徒達の海外交流校訪問を実現したいが、教員渡航費等の予算問題をクリアする必要がある。解決策を見つけ、近い将来実施できるように検討していきたい。

<2025年度 各言語クラス交流予定>

ドイツ語クラス	CJD他2校	オンライン交流2回 ビデオ、お土産を郵送交換
フランス語クラス	サンテレーズ高校	オンライン交流 2, 3回 クリスマスカードを交換
中国語クラス	嘉義高級中学校	オンライン交流を2回
スペイン語クラス	ひまわり日本語学校 日本メキシコ学院	オンライン交流を2回 オンライン交流を2回
韓国語クラス	世宗国際高校	オンライン交流を4回
EAP II	リットン高校	オンライン交流を複数回 ビデオ交換

6.3.2 共同実施校における国際交流

a 法隆寺国際高等学校

本校では、毎年3月に生徒を姉妹校に派遣し、その年の秋にその姉妹校からの派遣生を受け入れている。令和6年は3月にドイツに生徒を派遣し、10月にドイツの姉妹校生が本校を訪れた。3月にホームステイさせて頂いた生徒が、今回はホストになるというつながりを大切にしている。

ドイツ姉妹校との交流

日程：令和6年10月12日～10月20日

内容：ドイツ姉妹校の生徒15名は、到着後まずホスト家庭において、生徒とその家族との異文化交流を行った。最初の週末は、ホスト生徒とともに三重県伊賀市にて一日散策をし、伊賀忍者村等で異文化体験を行った。日本の一般家庭での生活を体験し、週末も共に過ごすことで互いの文化について理解を深めることができた。

校内での活動としては、国際交流委員がクラスへの受け入れ準備を行い、ドイツの生徒たちは、茶道・華道・書道の日本文化に触れるとともに、歴史文化科の授業の中で勾玉づくりを体験し、総合英語科1年生による法隆寺等についての説明を受け、世界遺産である法隆寺を訪れた。また、音楽や体育をはじめとする様々な授業にも参加することで、幅広く生徒との交流の機会をもつことができた。放課後は弓道部やダンス部の見学をし、ホスト生徒の所属クラス以外の生徒との交流も楽しんでいた。本校生徒にとっても、授業に姉妹校生が入ることで、交流を楽しむと同時に、英語でコミュニケーションを取ることさらに交流を深められるということがわかり良い刺激を受けていた。

12月の本校の探究学習の成果発表の場である「ユネスコフォーラム」において、国際交流委員のうちホストをした生徒が、交流から学んだことについて発表を行った。

《 写真上段左から右へ： 生け花体験、伊賀1日散策、法隆寺見学 、下段： 音楽の授業、体育の授業、弓道体験a 》



b 高取国際高等学校

アメリカ姉妹校との交流

日程：令和6年6月8日～6月17日

内容：アメリカ姉妹校（Shaker Heights High School）の生徒19名が本校生徒宅にホームステイしながら、本校での授業や校外学習を通して日本文化を学んだ。

授業体験においては、英語の授業に限らず、本校生徒とともに様々な教科の授業を受け、英語、日本語での交流を図った。また、日本独自の芸術科目である書道の授業を本校性とともに体験してもらった。放課後には、日本ならではの部活動である茶道、剣道、合気道を部活動生徒とともに体験してもらった。剣道、合気道については2回実施した。また、文化体験として、本校近辺の禅寺にて、座禅体験、奈良散策として、近鉄奈良駅周辺にて東大寺参詣、奈良公園、ならまち等の散策を本校教員と行った。

また、休日には、各ホームステイ先のホストファミリーがそれぞれ趣向をこらしたプランで姉妹校生を楽しませた。

韓国の高校とのリモート交流

日程：2024（令和6）年6月3日～12月20日（4回実施）

内容：韓国慶尚南道昌原市にある昌原明谷（チャンウォンナムグク）高校とZOOMによるリモート交流を4回、放課後に行った。参加生徒は希望者を募り各回10名ほどが参加した。

本校の参加生徒は主に韓国語の授業を選択している生徒であり、韓国側は日本語授業を選択している高校生である。テーマは「お互いの学校（学校生活紹介）」、「最近流行っていること」、「最近（自分が）ハマっていること」、「相手に尋ねてみたいこと」であり、自分たちの身の周りの今のことを、自分たちが今まさに学んでいる日本語と韓国語をお互いが交えながら伝え合って交流した。昌原市の高校との「韓国語～日本語」のリモート交流は今年で3年目となる。高校生同士が直接、リアルタイムに、しかもこのように継続的に対話することはとても有意義なことである。

韓国の大学との学校交流

日程：2025（令和7）年1月15日

内容：奈良県観光局からの紹介と奈良韓国教育院のご協力により韓国の大学と学校交流を行った。これは入学説明会および海外文化交流の目的で来日した大学生たちをお迎えしたものである。本校を訪れたのは韓国慶尚北道大邱市にある啓明（キョンミョン）大学の学生と引率の教員総勢18名であった。交流は2回行われた。初めは5限目の2年生の韓国語の授業（38名）で、まず韓国の大学と学生生活の紹介が行われ、続いて歌とダンスが披露された。その後は学生と本校生徒が一緒に参加したゲームなどを行い、大いに盛り上がった。次に放課後も同じ教室で希望者（参加生徒約35名）が集まって同様のプログラムで交流が行われ、これも大いに盛り上がった。



6.4 高校生国際会議の企画・開催

6.4.1 「高校生国際会議 in NARA」の概要

日時：令和6年12月24日（火）～26日（木）

場所：奈良春日野国際フォーラム麓、奈良県内各所

内容：奈良県内でのフィールドワーク、課題解決に向けたディスカッション

参加生徒：県立国際高等学校、県立法隆寺国際高等学校、県立高取国際高等学校、県立青翔高等学校、

県立桜井高等学校、奈良女子大附属中等教育学校、名古屋国際高等学校、京都教育大学附属高等学校、嘉義高級中学（台湾）から生徒、留学生計42名

(1) 実行委員会の立ち上げ（詳細は後述）

8月から、拠点校（県立国際高等学校）、共同実施校（県立法隆寺国際高等学校、県立高取国際高等学校）の3校の生徒による実行委員会を立ち上げ、3校による企画・運営行事として準備を始めた。

(2) 会議実施形態、内容

ディスカッション中心の会議とするため、完全対面での開催とした。奈良に集まり奈良で学ぶことにこだわり、奈良県内で持続可能な未来に向けて取り組んでおられる事業所や個人を訪ねるフィールドワーク、そこで学んだことから、参加生徒の国、地域が抱える課題解決のためのディスカッションという大きな流れを決定した。参加者は、「環境」「社会」「産業・経済」の3テーマに分かれ、テーマごとにグループに分かれてフィールドワーク、ディスカッションを行った。奈良県内のネットワーク校だけでなく、台湾の海外連携校や関西地域のWWL関係校からも参加していただけることとなり、多様な生徒の集まりとなった。ディスカッションを深めることができるよう、ディスカッションで使用する言語は、英語または日本語から選択できることとした。

(3) 英語ディスカッションセミナーの開催

英語でディスカッションをする選択をした生徒が、会議当日スムーズに議論が進められるよう、当日まで計3回の研修を奈良県立教育研究所にて開催した。運営を担当する3校の教員が協力して研修を企画し、奈良先端科学技術大学院大学の留学生にも協力をしてもらい、生徒たちの英語やディスカッションの指導を行った。

(4) プレ会議の開催

会議当日までに計2回、オンラインにて参加生徒全員によるプレ会議を開催した。3日間の会議がスムーズに行われ十分に議論が深まるよう、プレ会議においては、当日のグループでの顔合わせや自己紹介ワーク、自分の国や地域で抱える課題の共有などを事前に行った。

(5) 会議の様子

プレ会議において顔見知りになっていたこともあり、グループでの話し合いは初日から活発にスムーズに進められた。英語でのやり取りに不安を抱える生徒も多くいたが、実際にその場で必要に迫られて何とかコミュニケーションを継続することができていたことは、生徒たちの自信にもなったのではないかなと思う。

各フィールドワーク先で得た経験は、奈良県外や海外の生徒たちにとってはとくに新鮮で印象づけるものになったようである。そこでの体験が大きなインパクトになりすぎたことで、その後のディスカッションが自分たちの課題に落とし込むことをしきれないグループもあったが、環境や考え方、価値観の違う高校生同士が同じ課題について3日間語り合う時間は、普段の授業では作り出せないものであり、この事業でしか実現できないことであったと考えている。

(6) ホームステイ受け入れ

台湾からの海外連携校の生徒を会議開催期間中ホームステイで受け入れ、日本の日常生活を見てもらい、また生徒たちとのさらなる交流の機会とした。関係校の生徒で受け入れてもらえる家庭を募り、短い時間ではあったが貴重な交流の場となった。



令和6年度「高校生国際会議 in NARA」スケジュール(確定)					
	Day 1 12/24 (火)	Day 2 12/25 (水)			Day 3 12/26 (木)
	PM:奈良春日野国際フォーラム薨	AM:各フィールドワーク場所 PM:奈良春日野国際フォーラム薨			AM:奈良春日野国際フォーラム薨
		グループ1(環境)	グループ2(産業・経済)	グループ3(社会)	
7:30～		7:30 大和西大寺駅南口ロータリー出発 7:50 近鉄奈良駅商工会議所前出発 移動(貸切バス)		8:10 近鉄奈良駅春日ホテル前出発 8:30 大和西大寺駅南口ロータリー出発 移動(貸切バス) 9:00 国際高校集合	8:30 運営スタッフ集合(奈良春日野国際フォーラム薨)
9:00			8:50 近鉄奈良駅(行基像、噴水前)集合 移動(徒歩)		ディスカッション④ ～共有に向けての準備～
9:30		フィールドワーク 奈良で「課題に向き合う」オトナに出会う	フィールドワーク 奈良で「課題に向き合う」オトナに出会う	フィールドワーク 奈良で「課題に向き合う」オトナに出会う	
10:00		森庄銘木産業株式会社 取締役専務 森本達郎氏	啓林堂書店 代表取締役社長 林田幸一氏	サポートセンター花花 サービス提供責任者 日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟 監事 スポーツカメラマン 長田耕治氏	全体共有会 ～地域の持続可能性のために 高校生が考えたこと～
10:30		@森庄銘木産業株式会社事務所	@啓林堂書店奈良店・書院	@奈良県立国際高等学校	
11:00					まとめ(「約束ごと」の作成) (運営スタッフ、ボランティア)
11:30		ディスカッション② ～フィールドワークふりかえり～ 見たこと・聞いたこと 感じたこと・学んだこと・考えたこと 共有 課題に向き合う姿勢など 議論	移動(徒歩)	ディスカッション② ～フィールドワークふりかえり～ 見たこと・聞いたこと 感じたこと・学んだこと・考えたこと 共有 課題に向き合う姿勢など 議論	交流会(ファミリーの枠を越えたディスカッション)
12:00			ディスカッション② ～フィールドワークふりかえり～ 見たこと・聞いたこと 感じたこと・学んだこと・考えたこと 共有 課題に向き合う姿勢など 議論		閉会式 写真撮影
12:30	運営スタッフ集合 準備、打合せ	移動・ランチ(貸切バス)	ファミリーランチ @国際高校	フリータイム (ランチ)	
13:00					
13:30	会場オープン(奈良春日野国際フォーラム薨)		移動(貸切バス)		
14:00	開会式 学校紹介ワーク (各学校3分、それぞれの学校・地域のお気に入り紹介)	ディスカッション③ ～私たちは何を学んだか、何を未来につなげるか～ 自分たちの地域が抱える問題や課題に対して何ができるか			(嘉義高校・奈良女子大学附属中等教育学校との 交流会 @奈良市内)
14:30					
15:00	ディスカッション① ～会議に参加した目的、地域の課題～ (1)それぞれの地域のよいところ 未来につなぎたいところ	ファミリーさんぽ in Nara Park 運営スタッフプレゼンツ			
15:30	(2)それぞれの地域の課題 解決すべき問題(持続可能性を阻害する問題)	ディスカッション③ ～まとめ・発表準備～ 私たちは何を学んだか、何を未来につなげるか 自分たちの地域が抱える問題や課題に対して何ができるか			
16:00					
16:30	明日の持ち物、集合時間・場所等連絡 片付け、会場復元	明日の集合時間・場所等連絡 片付け、会場復元			
17:00	撤収・解散(ホームステイ出発)	撤収・解散(ホームステイ出発)			

Student Conference for Our Future 2024 in NARA

better Together

Guest Teachers

環境



森庄銘木産業株式会社 森本 達郎 さん

企業理念

「吉野の山を護り継ぎ、伝統ある銘木の技術を磨く」

事業内容

林業 木材販売 木質空間の企画提案 インテリア販売
創業1927年、奈良県宇陀市を拠点に地域課題解決へ向けた取組を行っています。

元氣な森を増やし、日本の豊かな暮らしを支えることを目標にしています。

経済・産業

株式会社啓林堂書店 林田 幸一 さん

1974年創業。奈良県下5店舗の書店を運営している。

「すべてのブックライフによりそう」をミッションに掲げ、本との出会いに留まらない「本がある暮らし」全体を豊かにすることを目標としている。

2023年12月に本を読む滞在型ブックカフェ「書院SHOIN」を開業。吉野金峯山寺「峙-SOWA-」など、本を味わう空間プロデュースも行う。



社会



サポートセンター花花 サービス提供責任者/
日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連
盟監事 長田 耕治 さん

皆さん、健康ですか？ 日々走り回って、友達と楽しくお話ししてますか？ もし、あなたが突然聴こえなくなったり、見えなくなったりしたら、どうしますか？ 世の中には、たくさんの聴こえない人、見えない人がいて、日々を健康に楽しく過ごしておられることをご存知ですか？ そんなことを考えながら、この一日を共に過ごしましょう。

6.4.2 生徒実行委員会

拠点校・国際高等学校から7名、共同実施校・高取国際高等学校から3名、法隆寺国際高等学校から1名の生徒が実行委員として参加し、会の企画・運営を担った。

8月末より運営スタッフ会議を対面で4回、オンラインで6回実施し、国際会議への参加者全員が参加するオンラインプレ会議と、3日間の国際会議のファシリテーターとして活躍した。本校の運営スタッフは校内選考のための作文と面接を課し、意欲のある生徒が集まった。対面実施の会では、それぞれの意見や思いを共有したり、国際会議をどのような会議にするか、何のための会議なのか、などを時間をかけて話し合った。「自分たちの未来のために、高校生として何ができるか」「それぞれの地域に帰ってからも自分たちの未来を共に作るための行動の約束ごとを作りたい」という意見が生徒たちから出た。それを元に国際会議の構成をした。

オンラインの会議では、ファシリテーターとして、また、参加者として「全体を見渡す力をつける」「しっかりディスカッションができること」「誰ひとり取り残さない空気を作ること」などを目標にディスカッション練習に力を入れた。

3つの分野、さらに小さなファミリー（グループ）に分かれてのディスカッションでは運営スタッフ全員がファシリテーターとしての仕事を担った。自ら率先して話を進めたり、なんとかみんなの意見を拾おうとする姿を見ることができた。

1月には事前の準備から当日の会議の様子まで、学校全体に共有し、学びを広めるために、全校生徒の前で共有会を実施した。「自分自身にとって人前で話をしたり、自分が会を進めていく、という立場に立つのは初めての挑戦だった。勇気がある時もあったが、挑戦できたことは大きな成長につながった」「講師の熱い思いを直接感じることができ、自分もそうありたいと思った。誰かのために一生懸命になれる大人はすごい、参加してよかった。」「全てがチャレンジだったが、熱い大人、熱い仲間に出会えたことはとてもよかった。自分自身も4ヶ月間で大きく成長した」などの感想を述べた。





7. 高度な学びの提供

7.1 高大連携の強化

7.1.1 大学との連携

a 奈良教育大学

高校第1学年生徒対象にグローバル探究Ⅰの授業の一環として、講演会及びフィールドワークを以下の内容で実施した。

日時：令和6年5月16日（木）8:30～12:30

対象：本校の高校一年生

場所：奈良春日野国際フォーラム薨会議室及び奈良公園周辺

講師：奈良教育大学特任准教授 大西浩明氏

令和6年5月16日（木）に、本校の高校第1学年生徒を対象に、奈良春日野国際フォーラム薨会議室および奈良公園周辺にて、講演会とフィールドワークが実施された。講師には、奈良教育大学の特任准教授であり、ESD（持続可能な開発のための教育）を専門とされている大西浩明氏をお迎えし、SDGs（持続可能な開発目標）に関する学びを深める機会を提供して頂いた。

当日の流れは、まず9:00から9:45まで、大西浩明氏による講演会が行われ、続いて10:00から12:00まで奈良公園および春日山原始林でのフィールドワークが行われた。講演会では、SDGsについての基本的な理解を深めるとともに、奈良県が抱える課題とその解決に向けた取り組みについて学んだ。講演後は、実際に奈良公園周辺で自然環境を観察し、春日山原始林の保全活動について具体的な事例を通じて理解を深めた。

【講演会の内容と学び】

講演会では、大西浩明氏にSDGsの概念や、持続可能な社会を築くために重要な要素について解説して頂いた。特に、環境保護や資源の持続可能な利用、人権の尊重といったテーマについて、具体的なデータや事例を交えて説明があった。大西氏は、SDGs達成に向けた個々の努力がどれだけ重要であることを強調し、私たち一人ひとりの行動が社会全体にどのような影響を与えるかについて考える機会となった。

また、講演の中で奈良県の課題についても触れられ、特に奈良の自然環境の保護と持続可能な利用について言及された。奈良公園や春日山原始林のような地域は、観光資源として重要であると同時に、自然環境の保全という観点からも多くの課題を抱えている。大西氏は、これらの地域が持つ生態系の重要性和、それを守るために地域住民や行政がどのような取り組みをしているのかを紹介した。

【フィールドワークの学び】

フィールドワークでは、奈良公園や春日山原始林の現地を実際に訪れ、自然環境を観察した。春日山原始林では、森の生態系や生物多様性の重要性について学び、実際に目の前に広がる自然を観察することで、講演会で学んだ内容を実感することができた。特に、春日山原始林がユネスコの世界遺産に登録されていることから、その保全活動の重要性を改めて認識した。生徒たちは、フィールドワークを通じて、自分たちが住む地域の環境や課題についての意識を高めることができた。また、自然と人間社会がどのように共生しながら持続可能な発展を目指すべきかについて考える機会となった。

【生徒の報告書内容】

生徒は、講演会とフィールドワークで学んだことをメモし、後日報告書を提出した。報告書には、①講演会を通して学んだこと、②奈良県の課題や取り組みについて、③それに対す

る生徒の意見が記されており、個々の生徒がしっかりと学びを整理し、考えを深めたことが伺えた。

多くの生徒は、奈良県の環境保護や持続可能な開発に関する課題を認識し、それに対して自分たちにできることとして、日常生活での環境への配慮や地域社会への貢献を意識し始めた様子であった。また、SDGsの達成には政府や企業だけでなく、市民一人ひとりの行動が不可欠であることを理解し、その重要性を再認識したと述べる生徒が多く見られた。

【結論】

今回の講演会およびフィールドワークを通じて、生徒たちはSDGsについての理解を深め、奈良県の課題とその解決に向けた取り組みについて学ぶことができたと考える。また、「課題発見力」や「分析力」を養うことができ、今後の探究活動に活かすための貴重な経験となったといえる。このような活動を通じて、生徒たちが地域や社会に対する意識を高め、持続可能な社会を目指して積極的に行動するようになることを期待している。

b 国際教養大学出張

昨年に引き続き、本校および奈良県教育委員会と教育に関する連携協定を締結している公立大学法人国際教養大学より、専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科の内田浩樹教授をお迎えし、ご講演いただいた。講演では、「進路設計について」「国際人になるために」「探究活動について」の3つのテーマについてお話しいただいた。

1. 日程：令和6年3月8日（金）1限～3限

2. 場所：プレゼンテーションルーム

3. 参加者：本校の高校1年生

4. 講演内容

- ①進路設計「頑張っても未来は開けない」
- ②国際人になるために「世界を飛び回ってもただの旅人」
- ③探究活動「Googleに相談するのは最後にして」

5. 生徒感想

「私は韓国の大学への進学を考えていますが、今日の講演の冒頭でお話しされていた「理想になっていかないか」という言葉が、まさに自分に当てはまると感じました。私は小学校6年生のころから誰よりも韓国への熱意があり、強い思いを持って韓国の大学進学を決めました。しかし、韓国でさらに何をしたいのかについては、まだ明確に見えておらず、理想の部分が多いのだと改めて気づかされました。日本にしながら韓国の大学の情報を集めるのは大変ですが、先生のおっしゃる通り、親が一生懸命働いて支え、応援してくれているからこそ、自分も後悔しないようにしっかりと調べ、努力していこうと思いました。」

「大学の学部名と実際の学習内容が大きく異なる場合があることを知り、進学先を選ぶ際にはしっかりと調べることの重要性を改めて実感しました。また、日本が取り組んでいる環境問題の対策の中には、実際には効果がないものもあると知り、大きな衝撃を受けました。ひとつの問題に対して、さまざまな視点から、そして根本的な部分から考える必要があると強く感じました。また、日本人が「考える力が弱い」と言われる理由についても、少し理解できたように思います。」

「ひとつの分野においても、別の分野や視点から見ると、自分が得をしていると思っていたことが実はまったく意味をなさない場合や、むしろ損をしている場合があることを知りました。このことから、物事を多角的に捉えることの大切さを改めて実感しました。」

「大学について調べてはいるものの、カリキュラムやシラバスなど、まだ十分に把握できていない部分があることに気づきました。そのため、1年生のうちにしっかりと調べておこうと思いました。また、自分が本当に興味を持てる分野をできるだけ早く見つけたいと感じました。」

「自分の進路選択や学科について、ほとんど知らないまま高校1年生を終えようとしていることに気づきました。これからはコツコツと情報を集め、自分の興味があることや自分に向いている分野を見つけていこうと思います。年齢を重ねるにつれて、できることが減ったり、手遅れになることが増えていくかもしれません。だからこそ、悔いのないように挑戦

できることには積極的に挑戦しようと思いました。自分の才能を生かし、楽しいと感じられる分野を見つけたいです。」

「現在、さまざまな社会問題に対して政府が行っている対策の中には、逆効果になっているものもあると感じました。そうした問題を正しく見抜き、指摘できる国民になることが大切だと思いました。また、それを見抜けない国民が多ければ、多くの人が政府の施策に対して何も意見を言えなくなってしまうのではないかと感じました。」



c 大阪公立大学 招待授業

1月15日（水）2年生9名で大阪公立大学を訪問した。高校生が大学を訪問し、大学教授や大学生との対話ができる機会である。高校生が自らの学びや変容を発表し、大学生から意見をいただける。また、教職課程を選択している大学生も受講しており、探究的な学びを進める高校や高校生の声を聞き、変化する学校現場を知ってもらう場でもある。高校生と大学生が互いに学びあえるよう設定していただいている。

2限目（11:00-12:00）

「吉田教授による特別講座」

2年生の生徒は一人ひとりが探究活動の疑問や進路のことなど吉田教授に質問し、それに答えていただく形式で懇談を行った。探究活動での悩みや進路の迷いを持っている生徒たちには、持続可能な社会を作るために自分たちは何を学び、何を身につけるために進学するのか、どの大学にどんな教授がいて、何を学びにいくのか、「目的思考型」で考えるようにと声をかけていただいた。身近な問題に意識を持ち、探究活動をしてきた生徒たちではあるが、どこかで自分たちの探究活動に自分で制限をかけてしまっていたり、満足しているところもあったので、探究を止めないこと、深めることへの意識の持ちようなどについてもアドバイスいただいた。

3限目（13:15-14:45）

「人間形成論」

学校の概要や探究活動を軸として国際高校が育てたい力、韓国でのスタディツアーなどについて担当教員が説明をした後、それぞれ生徒たちは自分たちが取り組んだ「探究活動の取り組みについて」それぞれ報告を行った。

1. 「いのちと地球の調和をたもつ」ゼミより、「地球温暖化とグリーンカーテン」
2. 「理解と尊重で世界をきずく」ゼミより「伝統工芸品」
3. 「公正公平な未来をつくる」ゼミより、「障がい者の防災」



d 同志社女子大学 大学講義

2月25日（火）国際高校の生徒11名、法隆寺国際高校の生徒3名、計14名で同志社女子大学を訪問した。高校1年生にとっては、進路を考え始める良いきっかけになるよう、そして高校2年生にとっては、自身の希望進路との照合や、学部の特性、今何をどのように勉強しておくべきか、それが大学での学びや将来の自分にどのように繋がるのかなど、より詳細な内容を学べる良い機会になるよう、大学内のキャンパスツアー、教授による講義、そして国際高校の昨年度の卒業生からのお話の3本立てで実施した。

(1) 大学キャンパスツアー

図書館や食堂、また普段は入れない実習室や研究室なども見学させていただいた。学校の図書館よりも遙かに多く多岐にわたる書物や広い学習スペースなどをみて、生徒たちの驚く姿がみられた。

(2) 教授による特別講義

学芸学部国際教養学科教授による言語学の講義と、看護学部看護学科教授による講義のいずれかを生徒たちは受講した。国際教養学科を受講する生徒が多く見受けられ、高校とは全く違った視点での言語の授業を受講し、興味深そうに話を聞いている姿がみられた。

(3) 卒業生からのお話

今の時期に何をすべきか、高校の時のどのように勉強していたのかなどの進路に繋がる質問と、実際の大学生活についての質問が多かった。自分たちと同じ高校の先輩の話聞くことができた為、有意義な時間を過ごせたと思う。



e 立命館アジア太平洋大学（APU）異文化理解研修

目的：立命館アジア太平洋大学は、学生の約半数が約90か国・地域から集まる国際的環境が特色の大学である。国際学生との交流を通し、異文化理解を深め、地球的な課題について英語で協議する力を身に付ける。

日時：令和6年11月27日（水）から11月29日（金）

場所：立命館アジア太平洋大学（大分県別府市十文字原1－1）

参加者：1年生4名 2年生7名

実施内容

- ・ APU学生団体企画
 - SDGsに関するグループワーク
- ・ 異文化理解・交流研修
 - 奈良県および国際高校の紹介
 - 国際学生の生活、出身国の文化、日本での生活などを知る
 - 質疑応答などのグループワーク
- ・ 国際交流
 - 高校生がグローバル探究で学んでいることについてグループに分かれて発表
 - グローバル探究ゼミ内容、テーマ内容発表
 - 質疑応答

研修時間内は、原則として全て英語でコミュニケーションをとる。

生徒感想（抜粋）

・ APU研修に行く前に、1から自分の探究と学校紹介のプレゼンを作成・練習し、しっかり事前準備をすることがとても大切だと改めて感じました。自分の英語力や発表する力に自信がなかったけど、APUの学生さんにたくさん褒めて貰って質問もしてもらって、意見交換もでき、とても良い時間になりました。先輩やAPUの学生さんが優しく話しかけて下さったので、不安や緊張がほぐれて安心して発表や質問、会話ができて、とても楽しかったし充実した3日間になりました。

・ 私はAPUに行って日本ではない国の人と関わることはこんなに難しくて楽しいものなんだと知りました。私は積極的に関わりにいけるタイプではなく、今回のAPUもとても悩みました。行くのは簡単でも行ってからAPUの学生さんたちとどんな会話をしたらいいのかとかAPUの国際学生の人にはどうやって話しかけたらいいのかなど不安はいっぱいありました。でもそこで一歩踏み出して今は本当に良かったと感じています。

・ 色々な国籍を持っている大学生の方達と一緒にゲームをしたり、英語でプレゼンをしてディスカッションしたりなど、国際学生と関わる楽しさをこの研修を通して学んだと思います。普段通りに生活しているとなかなか経験できないことを経験することができたので、遠かったけど行った価値は十分あったと思います。

・ 上手に英語が話せなくても、伝える努力をしっかりとしていたらちゃんと伝わるということが、2日間のAPU研修を通して知ることが出来た。また、それぞれの国によって考え方も前提知識も、当たり前だけれど英語の発音の仕方も、何もかもが違ったため、探究発表をした後の質疑応答の時間で様々な意見や色々な英語の発音、イントネーションにふれたり、自分だけでは見つけることが出来なかったプレゼンの不足点や疑問点を知ったりすることができた。

・ APUに行ったことで自分の中での選択肢が増えたと私は感じました。今後の探究活動ではさらに自分の探究に対して、私自身が持っているバックグラウンドも活かしつつ、共通点だけでなくどんな点が違うのかを違う文化、違う価値観を知りより物事を客観的にみれるように広い視野を持って自分がいる環境で自分ができるベストを尽くしたいと思います。

・一日目はコミュニケーションの難しさ、自分の英語力のなさを痛感して落ち込みましたが、活動を通してそれでも伝えようとするのが大事だと学びました。

また先輩が国際学生の方とスムーズに会話しているのを見て、英語を通して違う国の人同士でつながることはなんて素敵で楽しそうなんだろうと思いました。自分も先輩たちのようにもっと英語を喋れるようにこれから頑張りたいと思います。二日目の探究テーマ発表では自分の英語で通じるかどうか不安でしたが、発表途中で皆さんに頷いて頂いたり、良いテーマだと褒めていただいたり、フィードバックをして頂いたりして英語が通じ、伝わったことがすごく嬉しかったです。

・実際にAPUの研修に行って、たくさんの学生の方達と英語で交流したり、キャンパス内を案内してくださったり、いろいろなアクティビティを用意してくださって、とてもいい経験になりました。また、プレゼンをしている時にいろんな学生の方から「こうした方がいい」、「ここをこうすればもっと良くなる」といったことをアドバイスしてくださいました。これからのプレゼンにもしっかりと活かして行きたいと思います。正直、英語で英語のスライドを使ってプレゼンをするのが不安で仕方がなかったのですが、学生の皆さんが優しく温かく発表を聞いてくれていてとても安心しました。



f 奈良先端科学技術大学院大学

国際会議へのボランティア参加

奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 情報科学技術領域に所属する研究者より、本校に対し、主催する国際会議へのボランティアとしての協力依頼があった。この活動に関しての報告を以下に行う。

対象会議情報

- 対象会議名：マルチメディア解析に関するAI技術の国際会議（第31回）
<https://mmm2025.net/>
- 開催期間：2025/1/8(水)～10(金)
- 実施場所：奈良春日野国際フォーラム 麓
- 参加登録者：参加登録：241名
- 国別参加者（主催者公表資料より抜粋）

China ※	107	Iceland	4	Malaysia	2
Japan	53	India	3	Italy	2
Viet Nam	21	Switzerland	3	Poland	1
Taiwan	16	France	3	Hong Kong	1
Ireland	6	Pakistan	3	Belgium	1
Singapore	5	Austria	3	Australia	1
Greece	5	South Africa	2	Czech Republic	1
Germany	5	Norway	2	※VISAの問題で 減る可能性あり	
USA	5	Netherlands	2		

本校の取組

- ボランティア参加生徒は高校2年生 8名、高校1年生3名、中学2年生9名であった。
- ボランティア内容は、受付、会場運営補助、参加者への案内など多岐にわたった。
- ボランティア時間は、8:30～16:00までであった。
- 中学2年生、高校1～2年生に対して募集を行った。締切日以前に定員が満ちた。実際にはこれよりも多い希望者数があったと予想できる。
- 主催者からの要望により、1日目10名、2日目6名、3日目4名に振り分けた。さらに2名ずつのペアに分けた。
- 12月9日に、担当者をお招きして事前説明会をおこなった。その後は、担当者からの連絡をgoogleクラスルームを介して参加生徒に連絡した。事前課題（英語によって抱負等を記入）を課した。また事後アンケートをとり、振り返りを行った。

生徒の感想（抜粋）

- 話す時に完璧な英語にすることとか、正しい文法で話すように意識していたけどすぐに思ったことを英語で伝えることが難しくて、話すことに苦手意識を持っていたけれど、完璧に話すことよりも相手に伝わるように話しかけることを意識したので積極的に話したり情報を伝えることに挑戦することができました。
- 自分が成長できた点は、自分の英語のレベルを理解でき、もっと英語を話せたり、英語で書かれている文章を理解できるようになりたいと思えた点です。このボランティアに参加して、周りの友達や先輩方、運営している方々、そして発表されてい

た人が話している英語がほとんどと言っていいほど理解できませんでした。なので、このボランティアに参加した後、もっと英語を話せるようになりたい、もっと理解できるようになりたい、そのために今頑張れることは何か、そこまで考えられるようになった点が私の成長できた点だと思っています。

- 私が1番成長したと思う所は積極性です。私は周りを気にする癖が強く学校のプレゼンテーションやこういった海外の方と関わる場面では遠慮してしまったり、他人の意見に流されたりする場面が多かったです。ですが、今回のボランティアで積極的にいかなくては会話は始まらないし、自分から行かなくては成長には繋がらないと思い失敗してもいいから参加者の方と会話をとる行動をとれたからです。

生徒の様子



8 成果と課題

8.1 コンソーシアムの成果と課題

(1) 成果

- ・協働体制の構築

拠点校、共同実施校の3校で協働した取組が行事開催などにおいて実現できた。各校の物理的距離やスケジュールの違いなどにより、同時に双方向でやり取りすることは困難を極めたが、それでもオンラインやGoogle Classroomを活用しながら、同じ目標に向かって生徒、教員が取り組むことができたことは大きな成果である。協働する中で、生徒同士、教員同士のつながりもでき、他校の様子や取組を知る機会にもなった。

- ・「高校生国際会議 in NARA」対面開催

過去2回の「高校生国際会議」はオンラインも含めた開催であったが、初めて完全対面での開催にこぎつけることができた。その実現の背景には、海外連携校である台湾の嘉義高級中学が来日参加に快く応じていただいたことがあってのことであった。これまでのプレゼンテーション中心の会議からディスカッション中心の会議への改変、奈良での課題解決フィールドワーク、対面交流を実現し、その開催にあたっては、拠点校、共同実施校の3校の生徒、教員が企画、運営を担当した。顔をつきあわせた細かな話し合いが可能になったこと、奈良県内の事業所でのフィールドワークといった奈良らしい行事となったことは、対面でしか叶わなかった成果であったと思う。

(2) 課題

- ・関係校でのネットワーク構築

全関係校が参加するGoogle Classroomを活用した情報提供は適宜行ってきたが、普段の授業で活用できるような事例共有などの活用法にはまだ至っていない。現在、各校での活動事例や取組を収集しており、次年度からは、お互いに学校の様子が見ることができるようなプラットフォームとしたい。

- ・アウトバウンド事業

インバウンド事業は「高校生国際会議 in NARA」開催や各校での受け入れが進んでいることもあり活発になってきている一方で、アウトバウンド事業については、引率旅費の問題や円安傾向による費用高騰などが影響して進めにくい現状にある。本事業の集大成として企画途中にある関係校合同海外フィールドワークを実現させ、現地でしかできない探究プロジェクトを実施する予定である。

- ・大学先取り履修

今年度、奈良教育大学サマースクールを開催し、先取り履修、単位認定の検討を始めているが、いまだ実現には至っていない。大学との連携は進んでおり、奈良教育大学とは次年度もさらに充実した講座を生徒に提供いただく環境を検討している。

8.2 拠点校の取組の成果と課題

a. 成果

<探究の深化>

【グローバル探究】

・ アジスタディツアーの実施

グローバル探究のカリキュラムに位置づけられたアジスタディツアーを、高校2年生対象に開校以来はじめて実施することができた。

・ グローバル探究基礎のカリキュラム構築

昨年度開校した中学生においても「グローバル探究基礎」という科目を設定し、中学校1年生、中学校2年生に向けたカリキュラムを構築することができた。中学校2年生では、高校生と同じく3つのゼミに分かれて活動をしている。

・ 生徒のタテのつながり

探究週間に行う「たてにつながる探究交流会」を年に数回実施することによって、上級生には多面的な意見との出会い、下級生にはロールモデルとの出会いを提供することができた。中学校が開校したことによって、高校生と中学生のつながりの機会も創出できた。また、高校生の探究テーマに関心をもって、自らも探究を深める中学生も存在している。

【世界の言語】

・ カリキュラムの深化

「世界の言語」で、高校1年次に、日本語、英語以外に、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、日本手話などに会うことで、多様な言語・文化への興味・関心をもつことができた。5年間の実践で、プログラムが深化しつつある。

・ 生徒のタテのつながり

グローバル探究と同様に、世界の言語においても、本年度はじめて、中学2年生と高校1年生の異学年交流を実施することができた。

・ 国際交流

高校2年生・3年生では、選択した言語圏の生徒とのオンライン交流を年間で計15回実施することができた。

【英語で実施する教科】

・ 令和6年5月に国際バカロレアDP候補校となった。令和8年度からの実施に向けて、今年度は、英語で実施する予定の数学やESS（環境システムと社会）のカリキュラムを作成した。

【授業外の学び】

・ グローバル探究において、地域や自治体、大学、NPOなど、学校外のさまざまな機関とつながりながら、探究を進める生徒が多くなった。

<アウトバウンドの充実>

・ 海外大学進学

本年度卒業した3期生はすでに4名が海外大学に合格している。（中国1、韓国2、アメリカ1）そのほか6名が現在出願中であり、2期生の2名に比べ、海外進学者は増加した。奨学金に関する説明会なども新たに開催することができた。

・ 長期留学

本年度も10名が長期留学に向かっている。（アメリカ4 ハンガリー1 フランス1 インドネシア1 デンマーク1 カナダ1 中国1）

<インバウンドの充実>

・ 留学生の受け入れ

本年度も9名の長期留学生を受け入れることができた。学校内に「多様性」「寛容さ」などを育むことができている。

- ・国際交流

オンラインによる交流に加えて、台湾、韓国、フランス、メキシコ、ドイツから高校生を迎えて、対面での交流をすることができた。

b.課題とこれからの方向性

<探究の深化>

- ・スタディツアーの深化

連携校との探究についてのディスカッションが充実したものとなるよう、探究の内容を深化させ、英語力を高めるためのカリキュラムを構築していく必要がある。

- ・グローバル探究の評価方法の検討

探究の力の伸びを生徒自身が感じることができるよう、適切な評価方法について、検討を始めている。

- ・教員のタテ・ヨコのつながり

教員間の連携を深め、全教員が学校の目指す探究のあり方について共有し、ホールスクールで探究を進めていきたい。

- ・教科間のつながり

教科横断的な学びをより一層推進するため、「IDU（学際的な単位）」を高等学校でも実施していきたい。

- ・多様な言語・文化の比較

「世界の言語I」では、言語間の差異や共通点を見つけ出す機会をより多く設け、言語に対する意識を高めていくことができるよう、カリキュラムを深化させていきたい。また、国際交流を通して、多様な文化と自らの文化を比較し、受け入れるような機会も多くもちたい。

<アウトバウンド・インバウンドの充実>

- ・対面での交流

海外連携校の生徒を受け入れることはできているが、連携校への短期海外研修については、実現できていない。引率教員の旅費などを確保することが課題となっている。

- ・留学生の受け入れ

留学生の受け入れにあたって、ホストファミリーを見つけることに苦心をしている。地域住民にも周知をして協力を仰ぐなどして、受け入れ人数を増やしていきたい。

- ・海外大学進学支援

奨学金の説明会を増やしたり、低学年からIELTSやTOEFLを意識した英語力向上をサポートするなど、海外大学への進学にむけた体制をより一層強化する必要がある。

<高度な学び>

- ・継続的な連携・単位認定

奈良教育大学をはじめとした、さまざまな大学と協議を進め、単位認定のシステムを構築していきたい。

- ・国際バカロレアプログラムの導入

引き続きDPの認定に向けて取り組んでいく。

8.3 共同実施校の成果と課題

8.3.1 法隆寺国際高等学校

本校では、毎年探究活動の成果発表会と、ドイツやオーストラリアの姉妹校との交流を続けている。社会に関わる課題について、高校生として何ができるかを探究すること、そしてその探究内容を他校、他府県、海外の生徒とも議論することができれば、さらに視野が広がり、グローバルな視点で物事を見ることができるようではないか。

WWLコンソーシアム構築支援事業の一つである、令和6年度「高校生国際会議in NARA」はまさしく探究のきっかけとなり、視野を広げることができる機会であった。本校生徒も実行委員として参加した。9月以降、対面やOnlineでの実行委員会が2週に1度行われ、拠点校、共同実施校の生徒たちで話し合いを重ねた。また、3回の英語事前研修において英語でディスカッションをするための基本表現を学び、本番の12月24日～26日を迎えた。ディスカッションについては奈良先端科学大学院大学の留学生のサポートも受けた。本校生徒は相手の話す英語が理解できるのか、逆に述べたいことを英語で表現できるのか、等の不安を口にするこゝもしばしばあった。

県内6校の生徒のみならず、台湾や愛知県、京都府からも参加があり、自分たちの住む地域社会を少しでも改善したいという気持ちで集まった高校生たちが英語で語り合った。学校紹介でお互いの学校の特色を知り、個々がこの会議に参加する意義や問題意識をもっている事柄について話し合った。フィールドワークでは、現状を改善しようと奈良県内で活動している方々のお話を伺い、フィールドワークで学んだことを自分事としてとらえ、考えたことを意見交換した。英語でどう表現すればよいか戸惑うことがあってもファミリー（班）のメンバーで助け合い意見を伝え合っている姿が印象的であった。

本校生徒は、高校生国際会議を振り返り、英語での議論はやはり難しかったと感じつつも、もっと英語を上達させたい、もっと語彙を増やしたい、さらにいろいろな国のことを知りたいという前向きな感想を述べていた。

日程的なこともあり、今回本校からの参加者は生徒1名と長期留学生1名（会議当日のみ参加）の合計2名だけではあったが、このような素晴らしい機会を生かすためにも次年度はより多くの生徒が参加できるように呼びかけていきたい。

《写真左：第1回実行委員会、 右：高校生国際会議 in NARA学校紹介、 下：地域の課題についての共有》



8.3 共同実施校の成果と課題

8.3.2 高取国際高等学校

① 1年生

成果

自分でテーマを設定し、それについてどうすれば根拠のある発表になるのかを考え、工夫する力はある程度身についたように感じる。クラスメイトにアンケートを取ったり、フィールドワークに出て生物を採取したりするなど、調査方法を工夫したグループもあった。

課題

グループ間、生徒間で取り組みに差が大きく、全員に一定の力が身についたとはいえない。

② 2年生

(ア) あすか学・地歴探究

成果

あすか地域の歴史と産業について学び、地域の小学生との交流やイベントへの参加、最終報告の作成を通して学んだ内容を使った表現や他者と交流する力が身についた。

また、地域での学びをイベントへの参加や最終報告の形で地域へ還元することで、地域の方や企業からも「学校との関わりを感じる」などの「充実感」を感じるといった声をいただけた。

課題

地域の自治体・企業・教育機関に多大な協力をいただき、授業の実施、必要に応じて交通手段の提供を受けている。そのため、双方の事情によって計画通りにまたは経年による安定した活動に困難が生じるころがある（可能性がある）。また、交通手段が高取町・明日香村のバス提供のみとなっており、他地域での学習活動が困難であることも課題である。

(イ) 総合的な探究の時間

成果

発表、課題解決に向けてグループ内で様々な意見、アイデアを出し合い、それら話し合い、協力しながら一つに力まとめる力がついた。

課題

自分の足で取材し情報を取り込むということが少なかったことである。自分の目で現実を見ることが足りなかったのが残念であった。

③ 3年生

成果

内容が進路に関するものであったので、ある程度自分事として、取り組むことができていた。

課題

クラスの中で目標とする進路が、大学進学、短大進学、専門学校進学、就職と多岐にわたり、また入試の方式や時期も様々であったので、そのなかで、同じことに取り組むことにやや難しさを感じた。また、年度後半になると多くの生徒が進路を決めており、卒業後の進路に向けての取り組む内容に乏しさを感じたので、そのあたりが次年度への課題だと感じた。

④ 全体

成果

アウトバウンドについて、参加した生徒は帰国後も英語へのモチベーションを高く持ちながら、意欲的に学習を続け、報告会においても、良い発表をしていた。

インバウンドについて、授業等で交流を重ねることで、英語で意思疎通ができる喜びを感じ、その後の英語学習につながる生徒が多くいたと感じた。

課題

アウトバウンドについて、物価の高騰や燃油サーチャージの高騰で海外へ行くことのハードルが上がっているのが大きな課題であると感じる。

インバウンドについて、毎回の課題であるが、ホームステイ先を確保することに担当の先生方が四苦八苦されており、一番の課題であると思われる。

8.4 「グローバル探究」の評価分析について

学校法人 河合塾
学校事業推進部
山口大輔

1. 今年度の分析概要

例年同様に客観的な評価指標として「学びみらい PASS（以下 MMP）」の結果分析を行い、3 期生（現高 3）と 4 期生（現高 2）のジェネリックスキルの（図 1 参照）の伸長と、教育理念に基づいた「育てたい 6 つの力」の伸長について確認した。ジェネリックスキルと育てたい 6 つの力の関係性については図 2 のとおりである。

加えて、グローバル探究の時間において収集した「成長セルフチェックシート」の分析を行い、4 期生（現高 2）と 5 期生（現高 1）の自己評価の違いについて確認した。

以下に今年度行った代表的な 2 つの分析結果について報告をする。

図 1_MMP で測定するジェネリックスキル

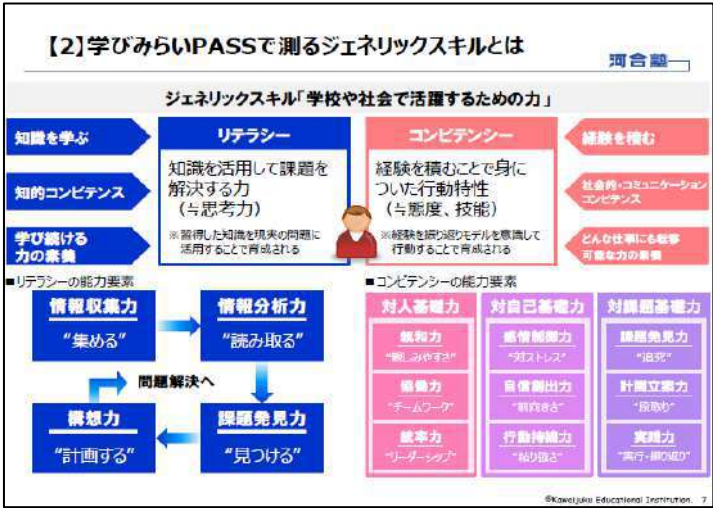


図 2_「育てたい力 6 つの力」とジェネリックスキルの紐づけ

	リテラシー 総合	コンピテンシー								
		対人			対自己				対課題	
		親和力	協働力	統率力	感情制御力	自身創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
探究力	●							●	●	
創造力	●									●
協働力		●	●	●						
寛容さ		●				●				
挑戦力						●	●			
キャリアデザイン力	●				●	●	●	●	●	●

2. 【分析①】3 期生（現高 3）と 4 期生（現高 2）の過回分析

(1) 分析概要

22年度～24年度のMMP結果より、3期生は高1から高3にかけて、4期生は高1から高2にかけてのジェネリックスキルの成長、および育てたい力の成長について分析を行った。データ件数は3期生163名、4期生115名である。

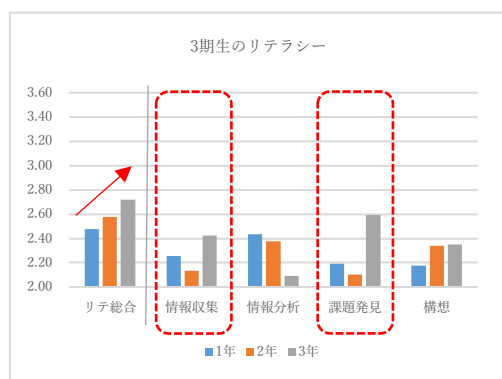
(2) ジェネリックスキルの成長について

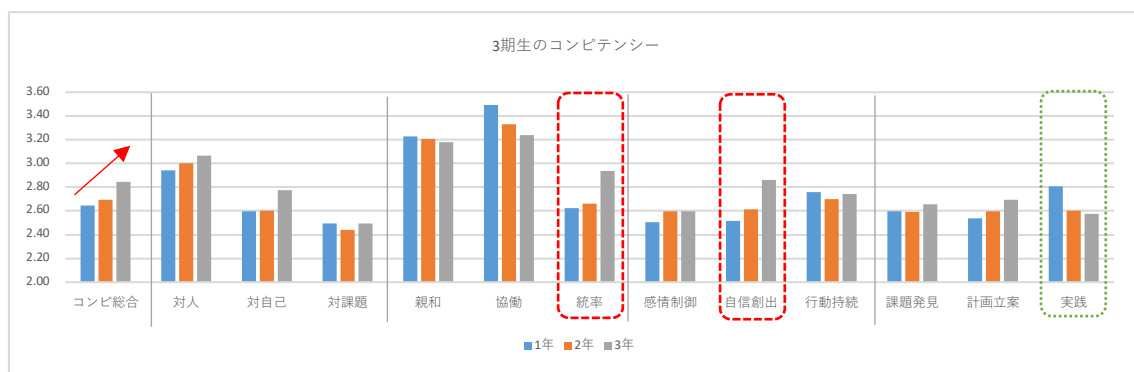
3期生の高1～高3の平均点推移(図3参照)をみると、リテラシーの「情報収集力」「課題発見力」が大きくV字回復しており、「目的に適した情報を幅広い視点から集める力」「背後に隠れている問題点や原因を探り当て、解決すべき課題を発見する力」が身についた生徒が多かったようだ。昨年の時点では1つ上の学年(2期生)と比べると、リテラシー総合の伸びがやや停滞していた学年であったが、高2から高3にかけて順調に伸び、最終的には2期生とほぼ同じ平均点となっている。

コンピテンシーでは「統率力」「自信創出力」が伸びており、「目標に向かってみんなを動かす力」「前向きな考え方ややる気を維持する力」が身についた生徒が多かったようだ。コンピテンシー総合も高2から高3にかけて順調に伸びており、過去においてコンピテンシーが高かった1期生と同じぐらいの平均点となっている。

また昨年と同様の指摘になるが、「実践力」が高1から高2にかけて下がったままであることにも触れておきたい。実践力とは「課題解決に向けて自ら行動し、検証・改善をする力」であるが、ここが下がったことと上述の「自信創出力」が上がったことを合わせて読み解くと、過剰なポジティブ思考からいざという時も何とかなるという気持ちが強くなりすぎ、自ら進んで行動することを妨げ、振り返りをせずにやりっ放しとなっているというケースが散見されるかもしれない。

図3_3期生のジェネリックスキル平均

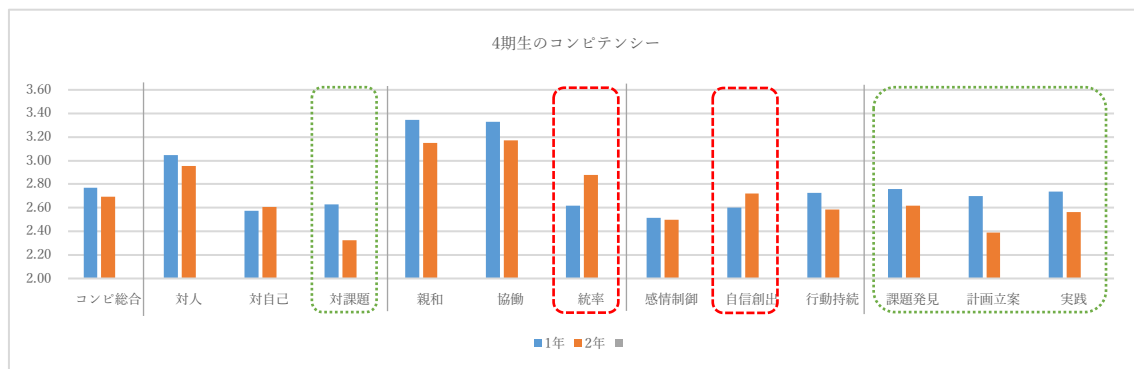
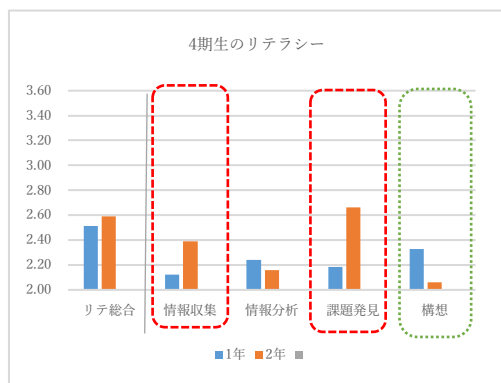




次に4期生の高1～高2の平均点推移(図4参照)をみると、リテラシーでは3期生と同様に「情報収集力」「課題発見力」を大きく伸ばしているものの、3期生と異なるのは「構想力」が大きく下がっている点である。構想力は「問題解決のプロセスを計画する力」であり、制約条件やリスクを想定し解決策を考えることに苦戦する生徒が増えたのかもしれない。

コンピテンシーでは全体的に苦戦しており、特に「対課題」に関わる力が3つともダウン傾向である。その中でも「計画立案力」が大きく下がっており、前述のリテラシーと併せて読み解くと、思考面(リテ)でも行動面(コンビ)でも計画を立てることに苦戦しているようである。そもそも計画を立てるには目標設定が必要である。逆に目標がないまま計画を立てることは難しい。そういう点で言えば、もしかすると目標設定から苦戦しているのかもしれない。なお、伸びている力は3期生と同様に「統率力」「自信創出力」となっている。

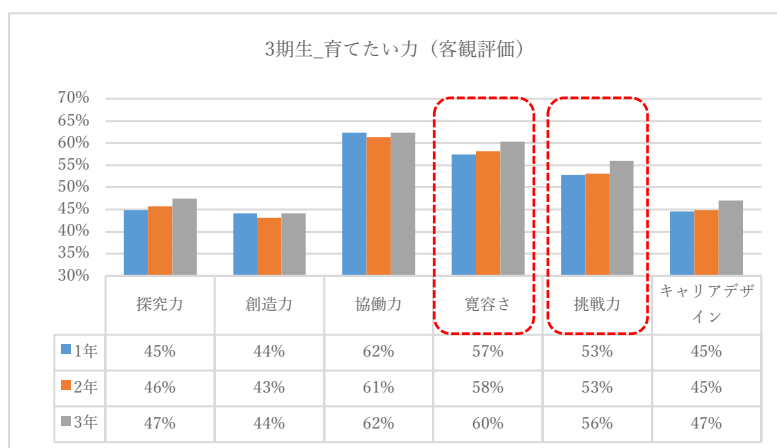
図4_4期生のジェネリックスキル平均



(3) 育てたい6つの力の成長について

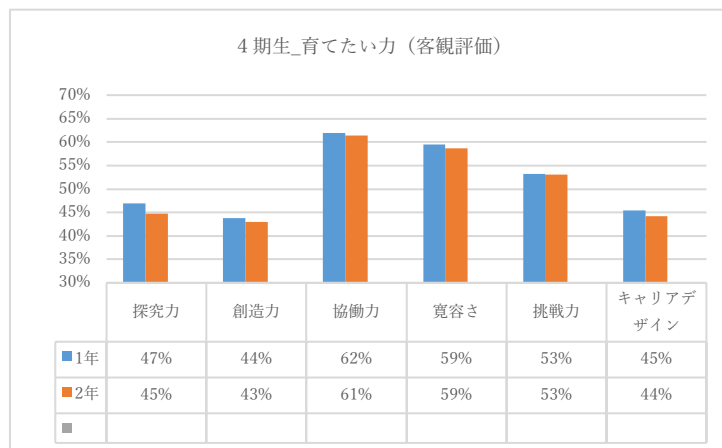
ジェネリックスキルと育てたい6つの力の紐づけ（図2 参照）に従って各スキルの合成変数から6つの力の到達度を算出し、3期生の高1～高3の変化をみたところ全ての力において上昇傾向がみられた。その中でも「寛容さ」「挑戦力」の成長が順調であった。これらの力はいずれもジェネリックスキルの「自信創出力」が関係しているため、自信創出力の成長が著しかった3期生の特長が反映された結果といえる（図5 参照）。

図5_3期生の育てたい6つ力（MMPを使った客観評価）



4期生の高1～高2の変化では、前述のとおりコンピテンシーが全体的にダウン傾向であったため、6つの力でみてもダウン傾向である（図6 参照）。残念な結果ではあるが、コンピテンシーは必ずしも学年成長とともに上がるものではなく、アップダウンを繰り返しながら緩やかに成長していく。実際に3期生も高2時点では一旦下がりつつ、高3にかけてV字回復している力が多い。数値が上がることは重要であるが、まずはこのように学校の育てたい力を客観的にみていくことが重要であり、この結果から教育改善に取り組みカリキュラム・マネジメントが推進されることを期待する。

図6_4期生の育てたい6つ力（MMPを使った客観評価）



3. 【分析②】4 期生（現高 2）と 5 期生（現高 1）の成長セルフチェックシート分析

（1）分析概要

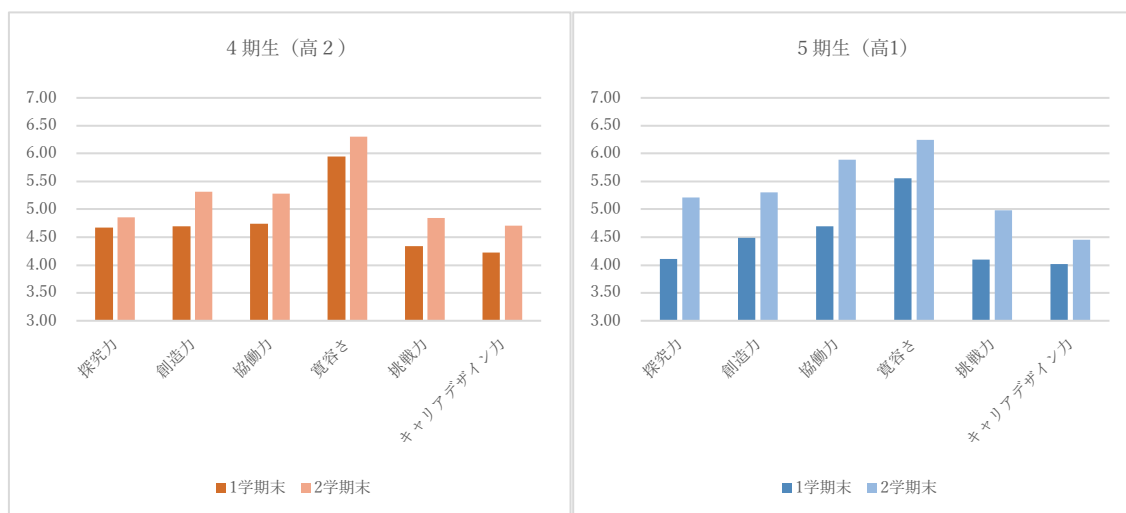
グローバル探究の時間において収集した「成長セルフチェックシート」の 1 学期末と 2 学期末の結果を使い、4 期生と 5 期生の自己評価の伸長度合いについて分析を行った。データ件数は 4 期生 90 名、5 期生 83 名である。

なお、この章では結果を読み解きやすくするために”●期生”ではなく”高●”と記載する。

（2）自己評価結果の振り返り

両学年とも 1 学期末から 2 学期末にかけてのセルフチェック平均は軒並みあがっており、この傾向は過去の学年（2 期生、3 期生）においても同様であった。また高 2 は初期値（1 学期末の評価）が高いために伸長度合いが低く、高 1 は初期値が低いために伸長度合いが高くみえる（図 7 参照）。

図 7_成長セルフチェックの平均値（1 学期末、2 学期末）



ところがそれぞれの力ごとに学年間比較をするとかなり印象が変わる（図 8 参照）。

探究力：1 学期末は明らかに高 2 のほうが高いものの伸長度合いは小さく、成長実感がほぼ得られていない。逆に高 1 は大きく成長実感が得られており、2 学期末には高 2 を上回る結果となっている。

創造力：両学年ともほぼ同様の傾向であり、学年間の差があまりない。

協働力：1 学期末の評価は両学年とも変わらないが、高 1 のほうが大きな成長実感を得ることが出来ている。

寛容さ：両学年とも 1 学期末の評価が高く、やや高 2 のほうが高いものの 2 学期末にはほぼ同様の結果となっている。

挑戦力：両学年とも同じような成長実感を得られているものの、わずかな逆転がみられる。

キャリアデザイン力：1 学期末の評価は高 2 のほうが高く、両学年とも同じような成長実感

を得られているものの、6つの力のなかでは一番数値が低く、自己評価しにくい内容なのかもしれない。

図 8_各力の伸長度（学年間比較）



以上より、全体的に高1のほうが伸長度合いが大きく、高2よりも成長実感を得ているように見える。特に「探究力」と「協働力」は高2を上回る評価となっているため、この2つの力についてより詳細な分析を行った。

(3) 探究力と協働力の自己評価について

それぞれの力においてチェックした数の度数分布を確認し、自己評価のつけ方が学年間でどのように異なるのかを調べた。加えて、1 学期末と 2 学期末のクロス集計をみることで、自己評価の変化についてみることにした。

① 探究力

図 9 をみると、1 学期末の時点で、高 2 は 4 ～ 5 個チェックが明らかなボリュームゾーンとなっており、全体の 54% を占めているが、高 1 は 1 ～ 8 個まで同じような割合で分散しており、そのため 7 ～ 8 個チェックをつける生徒が全体の 20% もおり、学年間で自己評価のつけ方が大きく異なっていることが分かる。

また 2 学期末では、高 2 でも 7 ～ 8 個チェックをつける生徒が増えてはいるものの、ボリュームゾーンは変わらず 4 ～ 5 個チェックであるために伸長度があまりみられない結果となっている。ところが高 1 は明らかに 1 ～ 2 個チェックが減少し、6 個以上チェックした生徒が全体の 45% と評価数の多い層が明らかに増えているため、大きな伸長度となったことが分かる。ちなみに高 2 の 6 個以上は 31% にとどまっている。

図 9_自己評価数の度数分布（探究力）

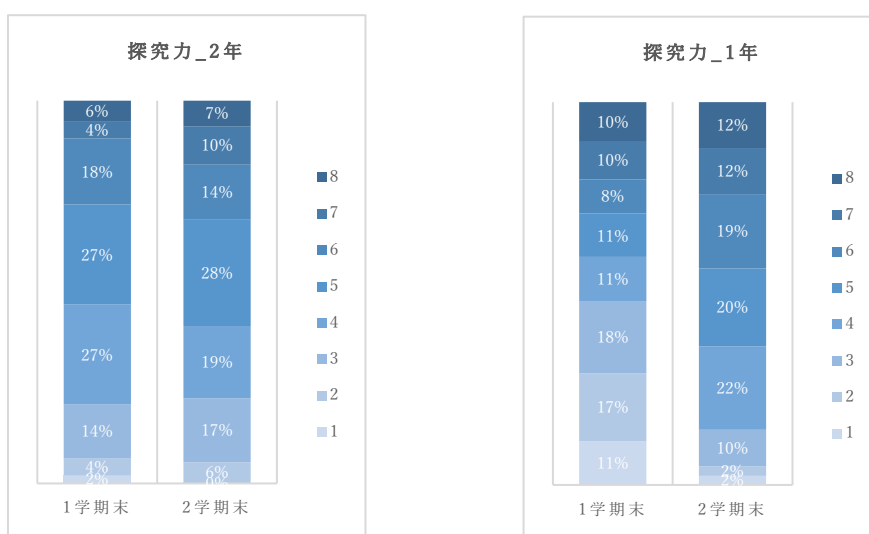
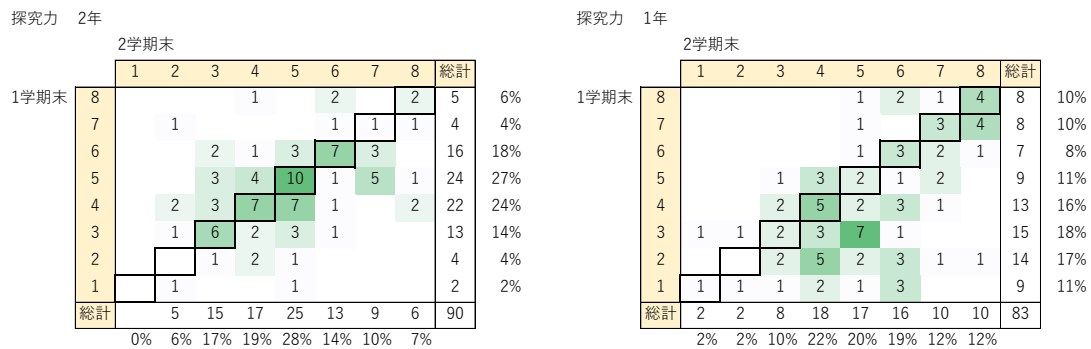


図 10 をみると、高 2 は評価数 5 個を中心に安定した自己評価となっており、ポジティブに捉えれば自分自身のことをしっかりと理解したうえで慎重にチェックしていると言えるが、ネガティブに捉えれば横並びを気にしすぎて目立ちたくないという思いが出ているのかもしれない。

逆に高 1 は 2 学期末に評価数を上げている生徒が多く、ポジティブに捉えれば新しい経験が多く本当にできる事が増えたと言えるが、ネガティブに捉えればメタ認知が甘いのかかもしれない。

図 10_自己評価数の変化（探究力）



② 協働力

1 学期末の時点で、高 2 は 4～5 個チェックが明らかなボリュームゾーンとなっており、全体の 58%を占めているが、高 1 は 8 個チェックが最も多くなっており 17%もいる。1 学期末時点の平均（図 8 参照）は両学年ともほぼ変わらないものの、その分布は全く異なっており、平均値と分布の両方を確認する重要性がよく分かるケースである。

2 学期末では高 1 の 8 個チェックが更に増えて全体の 29%となっており、高 2 が 10%しかいないことから平均で大きな差がついたのは理解できる。自己評価が高いことは悪いことではないが、高 1 の協働力がここまで高い理由は普段の生徒の様子も踏まえながら、その要因を探ったほうがよいかもしれない。

図 10_自己評価数の度数分布（協働力）

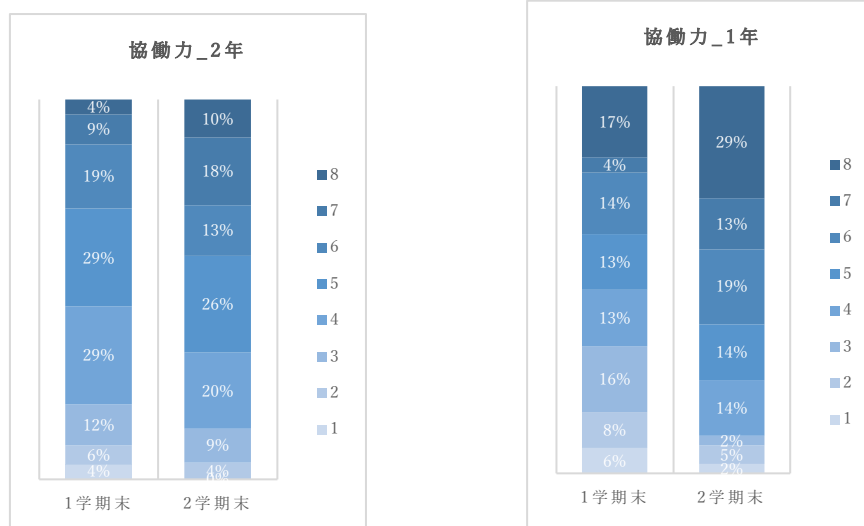


図 11_自己評価数の変化（協働力）

協働力 2年

		2学期末									
		1	2	3	4	5	6	7	8	総計	
1学期末	8				1				3	4	4%
	7				1	1	1	4	1	8	9%
	6			1	1	5	5	3	2	17	19%
	5			2	2	8	5	7	2	26	29%
	4		1	1	5	5	1	2		15	17%
	3			3	5	3				11	12%
	2		1		2	1			1	5	6%
	1			2	1					4	4%
総計			4	8	18	23	12	16	9	90	
			0%	4%	9%	20%	26%	13%	18%	10%	

協働力 1年

		2学期末									
		1	2	3	4	5	6	7	8	総計	
1学期末	8						1	3	10	14	17%
	7							2	1	3	4%
	6				1		4	2	5	12	14%
	5		1		2	2	3	2	1	11	13%
	4			1	5	3	4	2	3	18	22%
	3		2		1	6	2		2	13	16%
	2			1	3	1	1		1	7	8%
	1		2	1			1			5	6%
総計		2	4	2	12	12	16	11	24	83	
		2%	5%	2%	14%	14%	19%	13%	29%		

4. まとめ

今年度の結果をまとめると下記のとおりである。

- ① ジェネリックスキルでは、リテラシーの「情報収集力」「課題発見力」、コンピテンシーの「統率力」「自信創出力」において成長がみられた。
ただし4期生（現高2）はコンピテンシーにおいて苦戦している（特に対課題系）。
- ② グランドデザインとして掲げている『育てたい6つの力』にジェネリックスキルを紐づけたところ、3期生（現高3）は「寛容さ」「挑戦力」などの成長がみられたが、4期生（現高2）は伸び悩んでいる。
- ③ グローバル探究の時間では、『育てたい6つの力』の全てにおいて生徒は成長実感を得ることができている。

ただし学年間で自己評価のつき方に大きな違いがあり、現高2よりも現高1のほうが成長実感を得られていた。今後は個々の生徒の様子ともつけ合わせながら、評価の精度を上げていくことが期待される。

以上

8.5 「世界の言語」の取り組みの成果と課題

奈良教育大学 吉村 雅仁

8.5.1 「世界の言語」の意義

昨年度の報告で説明した通り、学校設定科目の一つである「世界の言語」は、全国的に、あるいは国際的に見ても、他に例のない言語教育カリキュラムである。それは、単に、英語以外に、韓国語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語の5言語の基礎を学び、さらにわずか1時間ではあるが日本手話も体験するという、学習言語数の多さだけではない。「世界の言語Ⅰ」において全員必修で8時間ずつその基礎を学ぶ5言語の学習内容が有機的につながっている点がある。その仕組みとして、各言語の教員が打合せをしながらほぼ共通の内容を元に各言語独自の要素を盛り込むよう工夫がなされている。また、5言語の学習の開始前と終了後に、欧州の言語政策で知られる複言語主義に基づいた内容すなわち複数の言語や言語学習を結びつける意識を高める「言語への目覚め」の講義が大学の研究者によって行われる。これらを総合すると、「世界の言語Ⅰ」は、元々欧州で提唱された複言語主義に基づく教育活動（以下、複言語教育）を日本で初めて教育課程に組み込んだ事例と言える。

ただ単に学習する言語を増やし言語ごとに別々のカリキュラムで行われる多言語教育と比較すると、複言語教育はいくつかの特徴的な効果をもたらすと考えられている。例えば、言語そのものの理解、言語間の共通点や相違点への気づき、言語能力や言語学習における相互転移の促進、学習言語だけでなく多様な言語への開かれた態度などの涵養である。このような資質能力を育むことにより、2年次以降の「世界の言語Ⅱ」や「世界の言語Ⅲ」あるいは日本語や英語そして将来必要となる言語を学びやすくなると考えられている。その意味において、この「世界の言語」は、言語教育学的に見て、先進的、実験的な取り組みでもある。

8.5.2 取り組みの成果

本校開設からこれまで様々な学術的な場において、中尾校長をはじめ、「世界の言語」担当教員および研究者（筆者）とで、この取り組みの成果を発表してきた。昨年度までの発表、公刊は次の通りである。取り組みの成果の詳細は下の（4）（5）をご覧ください。

- (1) YOSHIMURA, M., NAKAO, Y. and MIZUMOTO, H. (2021). »Organisation d'une expérience d'enseignement plurilingue dans une école secondaire japonaise (Organization of Multilingual Teaching Experience in a Japanese Secondary School)». (9th International Congress of Association Éducation et Diversité Linguistique et Culturelle, l'Université Aristote de Thessalonique, du 6 au 9 juillet, 2021)
- (2) YOSHIMURA, M. and TAKATANI, F. (2022). « Multilingual Lessons Conducted by High School Students for Primary School Students: A Collaborative Practice and its Effects on Students' Language Awareness and Use ». (International Association for Languages and Intercultural Communication Conference, University of Lisbon, 9 September, 2022)
- (3) YOSHIMURA, M. and OTTOSON, K. (2023). "Developing Intercultural Competence of Secondary School Students in Plurilingual Education". (10th International Conference of the Education and Linguistic and Cultural Diversity Association, June 28, 2023)
- (4) 吉村雅仁、中尾雪路、水本祐之（2021）. 「日本の高等学校における複言語教育実践の試み—5言語必修の多言語授業と言語意識活動—」『複言語・多言語教育研究』第9号, pp.82-98.
- (5) 吉村雅仁、高谷文也（2022）. 「高校性による小学生のための多言語授業—協働の実践による言語意識への効果—」『複言語・多言語教育研究』第10号, pp.227-236.

加えて、今年度の新たな報告として、「世界の奈良」の3年間全体の取り組みおよびその成果について、2024年7月にカールスルーヘ（ドイツ）で開催されたAssociation for Language Awareness 30周年記念大会において、フランスやノルウェーの研究者・実践者とともにシンポジウム形式で発表した。我々日本チームの発表タイトルは、“Plurilingual Education in Japan Through Collaboration between a High School Teachers and a Researcher: A Five-Language Compulsory Course with Language Awareness Activities”（発表者：吉村雅仁、高野正之）であった。この発表においては、日本の言語政策・教育の背景、「世界の言語」のカリキュラム、1年目の成果、3年間経験した生徒のインタビューの報告、カリキュラムに関わった言語教員の振り返り、日本の文脈における多言語言語意識教育（複言語教育）事例の総合的な成果と課題について説明した。他のチームもそれぞれの文脈において先端的な取組を行ってきたことが共有されたが、日本チームの実践に対しては多くの研究者から高い評価を受けた。特に、生徒の卒業時インタビューの動画は英語で行われたものであったが、英語圏での研修をわずか4週間しか体験していないにもかかわらず、母語話者のような運用能力を見せながら、多様な言語を比較しながら学ぶことで英語を含め他の言語学習も促進できたことを語っており、それについて複数の研究者から発表後に好意的なコメントをもらった。これは、複数の言語を同時に（順番に）学ぶ中で言語知識・能力の転移を促すことで、5言語以外の例えば英語の運用能力向上にもつながる可能性があることを示唆している。

以上見てきたように、「世界の言語」は、カリキュラム自体が学術的に注目される取り組みであり、生徒の言語能力・意識および言語学習への意欲や態度に多くの影響を与えることがわかってきている。このことは、実質的に英語しか学習機会のない日本の外国語教育政策を見直す一つの材料を提供するともいえよう。

8.5.3 今後の課題

上記のように先駆的、実験的なカリキュラムである「世界の言語」は、生徒たちの言語学習に関わって様々な効果が期待できるが、これを維持するあるいはさらに発展させるための課題が三つ存在する。

第一に、言語教育政策に関する管理職および教育委員会の価値観、考え方である。全国の「国際」の名が付く多くの高等学校において、ただ英語教育を改善、強化することを主眼とする例が圧倒的に多い中で、中尾雪路現校長は、本校開設計画時から「国際≠英語」を標語に掲げ、「世界の言語」を研究者とともに構想してきた。教育長をはじめとする当時の教育委員会も彼女を支え、この取り組みが実現したのである。これまでの学術的な実証研究から見てもその成果は明らかであり、特に英語教育の効果にも資する可能性が高い。全国的、国際的にその成果が期待されていることを考えれば、日本のほとんどの「国際」高校が標榜する「国際＝英語」に転換することなく、現在のカリキュラムの維持、発展を目指すべきであろう。

第2に、このカリキュラムを持続発展させようとするなら、可能なかぎり担当教員を専任化することが課題となる。現在の、スペイン語、フランス語、ドイツ語の担当については、各言語と英語の教員免許を有する専任教員が存在し、彼らを中心に「世界の言語」担当チームが形成され、学習効果を高めている。教員の業務負担の公平性、予算的制限など経営的な状況を考えれば簡単なことではないが、本カリキュラムの学術的、教育的重要性から、予算を優先的に確保してほしいものである。

第3に、複言語教育に必須の「言語への目覚め」の部分の担当者の問題である。これまで当該授業は、研究者をはじめとする学校外専門家との連携によるものであったが、そのまま学校外人材を恒常的に確保できるかどうかを検討すべきであろう。研究者との連携は「世界の言語」のような先駆的な取り組みの成果を学術的な場で広めることを容易にする長所があるが、研究者自身の異動や研究テーマの変更など不安定な側面があることにも留意が必要である。連携を維持、継続しつつも、協力が得られない場合に学校の担当教員が代理で実施できる体制を整えることも重要であろう。